

【論文】

集落の過疎・高齢化と住民の生活意識 — 島根県中山間地域での量的調査データをもとに —

片岡佳美

（島根大学法文学部）

【摘要】

本稿の目的は、集落の過疎・高齢化と住民の生活意識の関係について、2012年1月に島根県飯石郡飯南町の20歳以上の住民を対象に行なった質問紙調査のデータ分析を通して問題提起することである。

今回はそのために、回答者の居住集落の高齢化率、人口増加率、世帯増加率のそれぞれをカテゴリカルな変数にし、カテゴリごとの生活意識変数の平均得点を比較した。年齢の効果も考慮して分散分析を行なったところ、次のような傾向が伺えた。すなわち、(1)集落の存続についての意識では、高齢化率が高い集落の住民ほど危機意識が強いといった直線的な関係がある、(2)しかし、地域への思い入れや住民どうしの結びつきに関しては、過疎・高齢化の進行とともに衰退していくものの、ある時点まで過疎・高齢化が進むと、とくに高年層においてはポジティブに転換し、持ち直していく。とくに(2)は、過疎・高齢化が進むにつれて集落が衰退することを強調する、「限界集落」論の集落消滅モデルに沿わないという点で興味深い。

キーワード：過疎・高齢化、生活意識、「限界集落」

1. はじめに

日本の農村部において、集落の過疎化や高齢化はますます進行している。そうした動きのなかで、人びとは生活についてどのような思いや認識を持って農村集落で暮らしているのか。本稿の目的は、この点をめぐる議論に向けて、島根県飯石郡飯南町で行なった質問紙調査のデータの分析を通して問題提起することである。

農村における過疎化や高齢化については、いわゆる「限界集落」の問題として論じられている。農作業、農道・生活道づくり、冠婚葬祭、防災から日常的な助け合いまで、農村の人びとの生活は、集落というまとまりによって支えられてきた。そうした集落の活動の担い手がいなくなり、集落というまとまりの維持が「限界」になると、住民の生活も立ちゆかなくなってしまふ。集落が消滅一步手前の限界集落となっても、住民がそこに数人でも存在する以上、それらの人びとの日常生活が困難になるのであれば何とかしなければならない。

「限界集落」をめぐる議論はこのように、過疎・高齢化が進むほど集落（の機能）が衰退し

ていき人びとの生活が行き詰まるという問題に、注意を喚起し対策を迫る。ところが、その切羽詰まった状況が強調されるとき、限界集落と呼ばれる集落に対して「悲惨な集落、悲惨な暮らし」という見方（まなざし）が定着するおそれがあるとして、過疎・高齢化する農村地域に暮らしている当事者から懸念や遺憾も示されている¹⁾。

一方で、「限界集落」論へのそうした抵抗感は、「集落は元気」「住民がいきいき」といった反論、あるいは集落の活性化に向けた取り組みへの契機や動機づけにもなる。「限界集落」が注目されるなか、研究者が、また住民自身が、地域おこしにアクティブな集落や、住民が地域に誇りを持って生活している集落の事例について報告している（たとえば、小田切2009：山下2012）。また、各地の農村部で「元気な集落づくり」や「生きがいづくり」といった取り組み・施策が展開されることになる。たとえば、国土交通省の『過疎集落研究会報告書』（2009）においても、住民を元気づけることや生きがいを創出することが重要と述べられている。

これらから示唆されるように、過疎・高齢化が進行し「限界集落」化していくことは、住民の生活意識に大きな影響をもたらすだろう。また、そうした住民の生活意識が、集落機能の維持あるいは向上・低下を左右することも考えられる。小田切徳美が述べるように、住民に諦め感が広がりそれが一般化すると、いくら行政が集落を支援しようにも後退せざるを得なくなる、ということもある（小田切2009）。

したがって、過疎・高齢化の進行（限界集落化）と住民の生活意識がどのように関連しているかについて考えることは重要である。そこで本稿では、調査データの分析を通して、こうした議論のために問題提起を行なうことを目指す。住民にとって集落が過疎・高齢化していくことがどういう意味をもつのか、あらためて問いかけ考える機会としたい。

2. 方法

2.1 調査の概要

今回分析で用いるデータは、2012年1月に鳥根県飯石郡飯南町の20歳以上の住民を対象に行なった質問紙調査からのものである²⁾。

飯南町は、2005年、旧頓原町と旧赤来町の合併（「平成の大合併」）により誕生した。地理的には、広島県との県境、中国山地の脊梁に位置する。町内を松江市（鳥根県の県庁所在地）方面と広島県三次市・広島市方面を結ぶ国道54号線が縦貫する。車で松江市には約1時間半、広

¹⁾ たとえば、2007年に集落の自立支援のための「水源の里条例」を施行し、「全国水源の里連絡協議会」を呼びかけた京都府綾部市の四方八洲男市長（当時）は、「「限界集落」と言われると、そこに住んでいる人がどういう気持ちになるかということを考えれば、ふさわしくないとわかるでしょう。限界集落という言葉の響きは同情です。かわいそうだという意識でしょう。」と、「限界集落」の言葉の使用に反対している（『現代農業』臨時増刊『「限界集落」なんて呼ばせない：集落支援ハンドブック』（2008）のインタビュー記事より）。

²⁾ 本調査は、2010-2012年度科学研究費補助金（基盤研究B）プロジェクト『環瀬戸内圏農林漁業地域における女性・若者・高齢者の生活原理に関する総合的研究』（研究代表者：藤井和佐岡山大学大学院教授）における調査研究の一環として行なったものである。

島市には約2時間の距離である。鉄道は通っていない。

今日ほとんどの農村部において見られることであるが、飯南町でも、人口の過疎化と高齢化が進んでいる。町（旧頓原町・旧赤来町）の人口は、1960年には13,010人であったのが³⁾、1970年には9,163人、1980年には7,771人、そして2005年には5,979人と減少し続けている³⁾。一方、65歳以上人口が町人口に占める割合は、1960年では8.74%であったが、2006年では37.74%となっている³⁾。こうしたなか、近年の人口減少は、住民の転出によるものより自然減としてのもののほうが目立っている。2008年、飯南町の「出生者数－死亡者数」の差は84人、「転入者数－転出者数」の差は29人であった⁴⁾。

調査対象は、町の選挙人名簿から無作為抽出（系統抽出法）により938人を選出し、そのなかから福祉施設や社宅の居住者を除外した結果、最終的に907人になった。質問紙は郵送で配布・回収し（1月6日から1月31日までの期間）、有効回収票数は637票となった（有効回収率70.2%）。

回答者の性別の内訳は、男性41.0%、女性57.6%、不明1.4%、年齢層については20代5.2%、30代7.8%、40代9.4%、50代14.6%、60代23.7%、70代22.0%、80歳以上17.3%となっている。

2.2 分析枠組

質問紙では、回答者自身の、地域や家族についての意識、現在の生活状況などについて尋ねている。また、居住する集落についても尋ねているので、どの集落に住む人がどのような意識を示すのかが分かる。

居住集落については、「あなたが現在住んでおられるところの自治会または組はどこですか」という問いから捉える。旧頓原町には76の「組」、旧赤来町には51の「自治会」という組織があり、呼称は違うがそれぞれ「自治区」（2005年の設置当初の自治区数は22、その後再編を経て現在14）の構成単位、つまり自治区の下位組織であり、ともに「自治区長を通じて行われる行政からの伝達事項・配布物・調査・その他必要事項を地域内の住民へ周知」を役割とする（飯南町2006）。住民にとってこれらの組や自治会は「集落」とほとんど重なることから、本稿では、この「組」と「自治会」を集落として見なす⁵⁾。

今回は、集落の過疎・高齢化と集落住民の生活意識との関係を分析することが目的である。そこで質問紙調査から得られるデータとは別に、集落の人口データとして、集落ごとの日本人男女人口と世帯数（2011年・06年・01年・1998年）、および65歳以上・70歳以上男女人口（2011年・06年・01年）についての資料を、町役場を通じて入手した。分析は、これら二種類のデータを照らし合わせて行なう。

その方法は、次の通りである。まず、入手した人口データをもとに、集落別の高齢化率、人

³⁾ 1960年については国勢調査、2006年については住民基本台帳に基づく（飯南町2006）。

⁴⁾ 「島根の人口移動と推計人口」より（飯南町2006）。

⁵⁾ ただし、質問紙では、2～3の集落で一纏めにされた集落もいくつかある。これは、飯南町が作成した「飯南町自治区等マップ」の分類にならったためである。

口増加率，世帯増加率を計算する。それらの数値を一つのクロス表（行に集落，列に高齢化率，人口増加率，世帯増加率のそれぞれの値）にまとめたデータ・セット（Excel というワークシート1枚分）をつくる。次に，この人口データ・セットと質問紙調査データ・セットを結合する。質問紙調査データ・セットでは，各回答者の回答データが一行ごとに入力されているが，それぞれの回答者の居住集落は回答から判明する。その集落と合致する高齢化率，人口増加率，世帯増加率を人口データ・セットから検索し，各回答者の回答データに「当該回答者の居住集落の高齢化率」「当該回答者の居住集落の人口増加率」「当該回答者の居住集落の世帯増加率」をそれぞれ追加する。

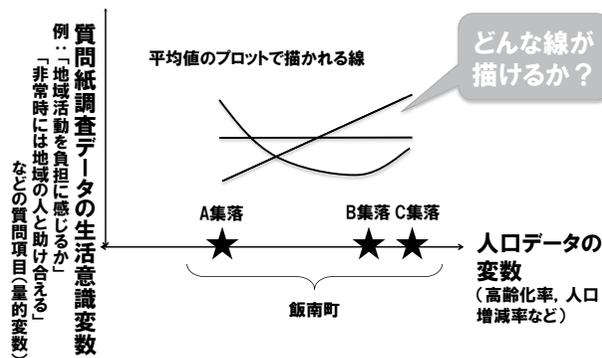


図1 分析枠組

このデータ・セットを用いた分析枠組について，図1で説明する。図の横軸は，高齢化率や人口増加率，世帯増加率の人口データの値を示す。右に行くほど，高齢化が進行，あるいは人口・世帯が減少となる。これを，過疎・高齢化の指標とする。飯南町は全体的に過疎・高齢化しているが，集落ごとの程度の差もある。この図では，A集落は，B・C集落ほどには，過疎・高齢化が深刻でないということになる。今回の分析では，このような集落間での過疎・高齢化の程度の違いに注目することになる。

図の縦軸は，質問紙調査から得られる生活意識変数の値を示す。回答者の居住集落が分かるから，集落ごとに意識変数の平均得点を出すことができる。その平均点のプロットは，この図でどんな形を描くのか。集落の過疎・高齢化が進めば進むほど，住民は地域生活について不安や不満など，ネガティブな意識を示すようになるのか。あるいはそうでないのか。その点を明らかにすることが分析課題となる。

2.3 変数の概要

分析で用いる変数を説明しておく。人口的要因に関する変数，すなわち，集落ごとの高齢化率や世帯増加率，人口増加率は次のように算出する。まず，高齢化率は，今回は最新の2011年の65歳以上人口を同年の全人口で割った値を用いる。今回の飯南町データでは，最も高齢化率が高い集落で0.786，最も低い集落で0.188である（平均値は0.388）。

人口増加率は、入手した人口データの中で最も古い1998年の集落人口を、最新の2011年の集落人口で割って求めた。データにおいて、人口が最も減少している集落では0.514、最も増加している集落で1.343であった（平均値は0.805）。人口増加率は、この13年間での世帯の増減を見たものであるが、もしさらに長期の変動を見ることができたら増減の幅はもっと大きくなったであろう。

世帯増加率は、1998年の集落内世帯数を2011年の集落内世帯数で割った数値を用いる。最も減少している集落で0.524、最も増加している集落で1.737である（平均値は0.931）。人口増加率同様、ここでも、この13年間の増減しか捉えられていない。

高齢化率と人口増加率、世帯増加率の間の相関は、それぞれ有意である。相関係数は、高齢化率と人口増加率については $r = -.352$ ($p < .001$)、高齢化率と世帯増加率では $r = -.146$ ($p < .05$)、人口増加率と世帯増加率では $r = .592$ ($p < .001$)となっている。

今回、過疎・高齢化と住民の生活意識の間の関係が直線的でない場合を想定し、その非直線関係を捉えることができるよう、これらの人口的要因に関する変数はいずれもカテゴリカルな変数に変更した。そのため、高齢化率、人口増加率、世帯増加率のそれぞれは、データを8等分して8カテゴリーからなる変数となった。分割が細かすぎず、また荒すぎて値が変化するにつれてどういう動きが見られるかが分からなくなることがないようにするには、8分割が適当と考えた。分析のさいには、カテゴリー間で、回答者の生活意識変数の平均値を比較することになる。

被説明変数である、生活意識に関する変数は、地域や家族、生活全般についてのさまざまな考え方について、「非常にそう思う」から「まったくそう思わない」までの5件法で尋ねた28項目からつくった。これらの28項目を因子分析にかけた結果、7因子が抽出されたため（表1）、それぞれの因子を、「地域住民信頼協力」「地域愛」「伝統家族」「不安孤独」「地域住民とのつきあい」「集落危機意識」「地域住民への依存」に関する因子と捉えた。各因子に強い影響を持っている質問項目それぞれの得点（5件法なので、肯定するほど高得点になるように1～5点を配点。ただし、表1中の項目で（逆転）と記すものについては、否定するほど高得点になるように1～5点を配点している。）を合計し、因子名と同じ変数を新たにつくった。たとえば、「地域信頼協力」という変数は、住んでいる地域について、「地域住民は、互いに信頼しあっている」「地域活動では、新しい考えも積極的に取り入れられている」「地域活性化に向けて努力している」「葬儀は、地域住民で行なっている」「災害などの非常時には、地域の人と助け合える」「住民共同で、地域の草刈りや清掃などを行なっている」「子育てするには、よいところである」のそれぞれについての評価で、肯定的な回答が多ければ得点が高くなる。

これらの変数を用いて、過疎・高齢化と生活意識がどのような関係を示すかについて明らかにする。

表1 生活意識に関する項目の因子分析の結果

	地域住民 信頼協力	地域愛	伝統家族	不安孤独	地域住民と のつきあい	集落危機 意識	地域住民 への依存
地域住民は、互いに信頼しあっている	.796	-.053	-.060	.006	.009	.022	.114
地域活動では、新しい考えも積極的に 取り入れられている	.745	-.078	.138	-.056	-.113	.026	-.022
地域活性化に向けて努力している	.687	.051	.075	.070	.033	-.025	-.058
葬儀は、地域住民で行なっている	.481	-.077	-.106	.028	.128	.001	-.089
災害などの非常時には、地域の人と助 け合える	.453	.059	-.089	-.008	.446	-.051	-.083
住民共同で、草刈りや清掃などを行 なっている	.399	-.010	-.096	-.001	.002	.162	-.001
子育てするには、よいところである	.351	.217	-.015	-.042	-.043	-.038	.081
地域の人に役立ちたい	-.174	.873	-.065	-.001	.063	.001	.003
地域に誇りを持っている	.096	.706	.091	-.012	-.101	-.002	.102
地域の伝統行事に対して深い思い入れ がある	.088	.574	.196	-.037	-.035	.077	.023
地域活性化のための活動に関心がある	.285	.424	-.007	-.001	.192	-.003	-.099
地域活動への参加を、負担に感じる (逆転)	.069	.272	-.064	-.198	-.022	-.145	.030
婚姻・血縁関係がなくても、家族とな りうる	.150	.241	-.129	.084	-.136	-.033	.169
長男には、家を継ぐ責任がある	-.079	-.095	.815	.092	.063	-.041	-.025
先祖から受け継いだ土地や家は、なん としてみまもりたいものだ	.120	.150	.646	.082	-.147	-.061	-.064
結婚しない、という生き方もあってよ い(逆転)	-.106	.102	.548	-.078	-.083	.065	-.069
老後、頼りにできるのは、やはり子ど もだ	.074	-.226	.542	-.065	.070	-.021	.193
家族は、一心同体であるのがよい	-.101	.056	.470	.000	.146	.058	-.037
さみしい	-.041	-.068	.126	.696	.059	.000	-.079
健康面で不安がある	.064	-.003	.108	.658	.033	.015	.077
毎日が充実している(逆転)	.046	-.064	-.172	.546	-.187	-.069	-.211
地域の人に迷惑をかけている	-.073	.019	-.002	.539	.007	-.018	.486
経済面で不安がある	.023	.071	-.185	.466	-.042	.071	.117
地域の人とよく話をする	.073	-.040	.027	-.027	.780	.009	.070
地域の人と、家族同然のつきあいをし ている	.065	.272	.017	.139	.387	-.034	.112
多くの地域住民に、このままでは集落 が存続できない、という危機感がある	.013	.084	.044	.116	.064	.645	-.114
祭りなどの伝統行事の維持が、だんだ ん難しくなっている	.109	-.097	-.025	-.048	-.073	.611	.110
地域の人に助けられている	-.024	.119	-.035	.051	.093	.011	.676

因子抽出法：主因子法，回転法：プロマックス法

3. 結果

高齢化率、人口増加率、世帯増加率のそれぞれについてつくった8つのグループ間で、上述の生活意識に関するさまざまな変数における平均値を比較するため、分散分析を行なった。年齢の効果との交互作用も考慮するために、二元配置の分散分析を行なった。ここで用いた年齢の変数は、60歳未満グループと60歳以上グループの2つのカテゴリーからなる。結果を表2に示す。

高齢化率と年齢を因子とした二元配置分散分析の結果では、「地域住民信頼協力」「地域愛」「伝統家族」「地域住民とのつきあい」のそれぞれで、年齢因子の主効果が有意と認められた。

表2 二元配置分散分析の結果（数値はF値）

	地域住民信頼協力	地域愛	伝統家族	不安孤独	地域住民とのつきあい	集落危機意識	地域住民への依存
年齢の主効果	20.494 ***	5.795 *	67.297 ***	1.792	31.345 ***	.081	2.597
高齢化率の主効果	1.301	2.438 *	.777	.529	.314	3.655 **	1.014
交互作用	.867	.644	.403	1.149	.947	.823	1.431
年齢の主効果	19.966 ***	5.219 *	66.965 ***	1.579	31.613 ***	.465	2.567
人口増加率の主効果	1.249	1.172	.450	1.013	1.230	3.902 ***	.671
交互作用	.916	.525	.469	1.545	.306	.746	.958
年齢の主効果	20.310 ***	5.069 *	61.286 ***	.648	28.588 ***	.624	2.808 †
世帯増加率の主効果	1.348	.602	1.171	.668	1.126	.988	2.257 *
交互作用	1.824 †	1.634	.581	1.356	1.682	.715	1.076

†...p<.1, *...p<.05, **...p<.01, ***...p<.001

人口増加率と年齢を因子として分析した結果で、年齢因子の主効果が有意と認められたのは、「地域住民信頼協力」「地域愛」「伝統家族」「地域住民とのつきあい」であった。そして、世帯増加率と年齢を因子とした結果では、「地域住民信頼協力」「地域愛」「伝統家族」「地域住民とのつきあい」「地域住民への依存」のそれぞれで年齢因子の主効果が有意であることが示された。

年齢の主効果が有意と確認されたものについて、一部をグラフにした（図3，図4）。図3は、高齢化率と年齢を因子、「地域住民信頼協力」（地域住民が信頼し合い、協力して集落の活動を担っているという認識）を従属変数としたグラフ、図4は、人口増加率と年齢を因子、「地域住民とのつきあい」を従属変数としたグラフである。いずれも、平均得点は60歳以上が60歳未満より高い。こうした傾向は、年齢の主効果が有意と確認された他の分析結果でも見られた。60歳以上の高年層の住民は60歳未満の住民よりも、地域の人びととの交流や共同の活動を重視し、地域に対する思いや愛着も強い。また、高年層のほうが、長男が継ぐ家というまとまりを重視している。これらからは、イエの維持とムラの維持がセットになっていることが推察できる。

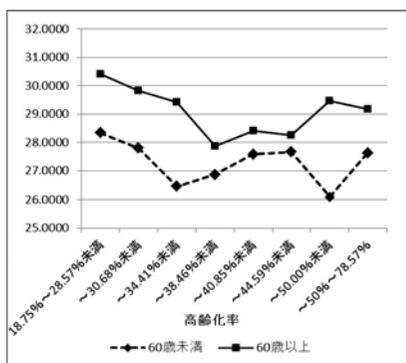


図3 「地域住民信頼協力」を従属変数とした分散分析

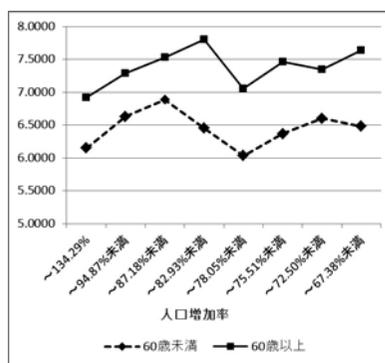


図4 「地域住民とのつきあい」を従属変数とした分散分析

一方で、「不安孤独」「集落危機意識」「地域住民への依存」を従属変数とした結果では、年

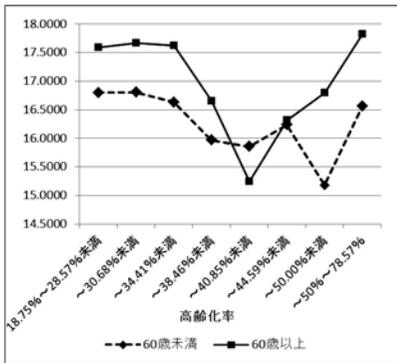


図5 「地域愛」を従属変数とした分散分析

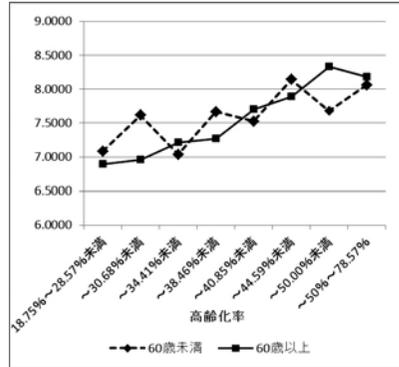


図6 「集落危機意識」を従属変数とした分散分析

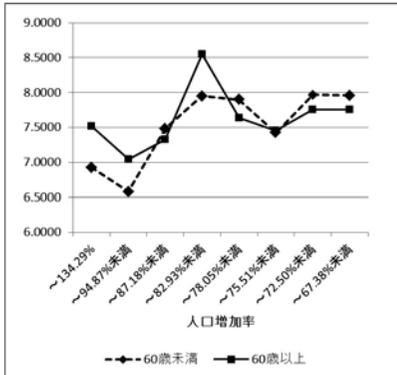


図7 「集落危機意識」を従属変数とした分散分析

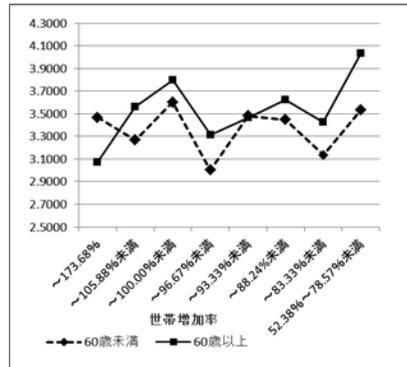


図8 「地域住民への依存」を従属変数とした分散分析

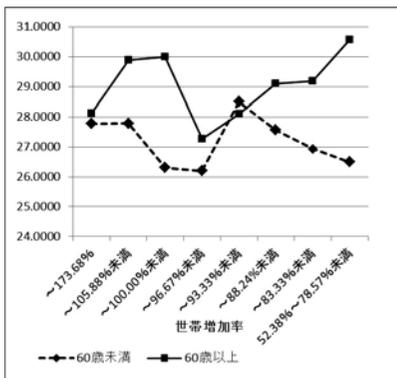


図9 「地域住民信頼協力」を従属変数とした分散分析

齢の効果は有意ではなかった。高年層であるか否かの違いは、これらの点ではなく、地域への愛着や人びとの結びつき、イエ意識という点にある。

ところで、高齢化率の主効果が有意と認められたのは、「地域愛」と「集落危機意識」、人口増加率の主効果が有意と認められたのは、「集落危機意識」のみ、そして世帯増加率の主効果が有意と認められたのは「地域住民への依存」のみであった。また、世帯増加率と年齢との交互作用については、「地域住民信頼協力」のみ有意であった。

人口的要因よりも年齢の影響が強く出たという結果になったが、一部、人口的要因に住民の生活意識が影響されるということも示された点に注目したい。人口的要因の効果（主効果、および年齢との交互作用）が有意と認められた結果を図5～9に示す。

図5のグラフでは、60歳未満／以上どちらにおいても、高齢化率が上がるにつれ下降していく線が、高齢化率がある点以上になると上昇に転ずるというV字の線が見いだされるが、60歳以上においてはそれがより明確に表れている（年齢の主効果も有意）。60歳以上の住民については、「地域愛」（地域の一員としての意識から、地域に対して誇りや貢献したいという思いが強いことに関連する）の得点がより低いのは、高齢化率が最も高い集落というよりは中間の40%前後の集落であり、むしろ高齢化率が50%以上の集落は最も低い集落並みに得点が高い。つまり、地域への思いは集落の高齢化により減退するとも言えるが、高齢化が高度に進んだ集落では逆に強くなるということが示唆される。

図6では、V字型ではなく斜め一直線が描かれているように見える。つまり、集落の高齢化率が上がるほど「集落危機意識」が高くなる、という分かりやすい関係が見られる。年齢効果は有意でないので、60歳未満／以上の両方で見られる傾向と言えすが、60歳以上のほうがはっきりした斜め一直線を示している。

しかし他方で、同じ「集落危機意識」について人口増加率で比較した場合は、図7に示すように、直線的な関係は描かれない。図7の横軸は右に行くほど人口減少の割合が大きくなることを示すが、これを見ると直線ではなく逆V字で、「集落危機意識」の平均得点が高いのは、人口が大きく減少している集落というよりは、中程度の減少の集落である。これも、60歳未満／以上で共通している傾向と言えすが。

世帯増加率で比較した図8～9でも、凸凹の線が描かれている。とくに、60歳以上については、N字型の折れ線を描いているように見える。60歳以上では、「地域住民信頼協力」「地域住民への依存」のそれぞれは、世帯増加率が96.67～100.00%未満のグループと最小の（つまり、最も世帯が減少している）52.38～78.57%未満のグループで平均得点が高い。そして、その間に位置するグループでは、平均得点は低くなっている。

ここでは有意差のあるものについてのみグラフを示したが、有意差が認められないものでも、グラフ化すると、はっきりしたV字やN字を示さないにせよ凸凹の折れ線が伺えるものは多い。全体を通して、高齢化、あるいは過疎化（人口や世帯数が減少）が進むほど〇〇となる、といった直線的な関係を想起させるものは図6のみであった。

以上から示唆されるのは、過疎・高齢化は住民の地域に対する思いや住民どうしの結びつきに影響するが、程々に進行している集落とかなり進行してしまった集落では、違った反応を示

すということである。すなわち、過疎・高齢化が高度に進んだ集落では、むしろ地域への思いは強くなり、とくに高年層では住民どうしの結びつきも重視される。もっとも、こうした傾向にもかかわらず、集落の存続の危機についての意識は、高齢化が進むほど強まる傾向は見られる。

4. 考察

集落の過疎・高齢化と住民の生活意識の関係について、今回の分析結果からどのようなことが論じられるだろうか。これまでの「限界集落」論をもとに、考察してみたい。

「限界集落」という概念を最初に提示した大野晃によれば、集落を構成する世帯の大部分がどのライフステージにあるか（ただし実際には、年齢を指標としている）によってその集落の存続の危機の程度が変わってくるという。そして、危機の程度に応じて、集落は「存続集落」「準限界集落」「限界集落」「消滅集落」という段階に並べられる。「存続集落」とは、55歳未満人口が集落成員の半数以上を占めている集落で、集落自治の担い手を再生産できている集落とされる。「準限界集落」とは、55歳以上人口が集落成員の半数以上を占める集落で、集落機能は維持してはいるものの、集落自治の再生産が難しくなっている集落である。そして、「限界集落」とは、人口の半数以上が65歳以上の高齢者で、集落生活の担い手が確保できなくなり社会的な共同活動の維持が限界にきている集落のことである。やがて、高齢者の多い「限界集落」は自然減によって人口が減り、最後に「消滅集落」となる（大野1991, 2005, 2008）。

大野の「限界集落」論に対しては、批判もある。たとえば、徳野貞雄は、集落にはそれぞれ異なった歴史と性格があるということを考慮せず、人口的要因にのみ注目して集落の危機や再生を論ずる傾向について警戒している（徳野2008）。山下祐介も、同様な立場である。そして、実際に全国の「限界集落」を調査し、そのほとんどが今なお消滅にいたっていないことを確認している。そのことから、限界集落といっても中身は多様で、どれもが高齢化→限界→消滅、という単純な段階図式で説明できないことを主張している（山下2012）。

ただ、これらの批判的な研究者も、高齢化と過疎化の先に「消滅の危機」があるということ

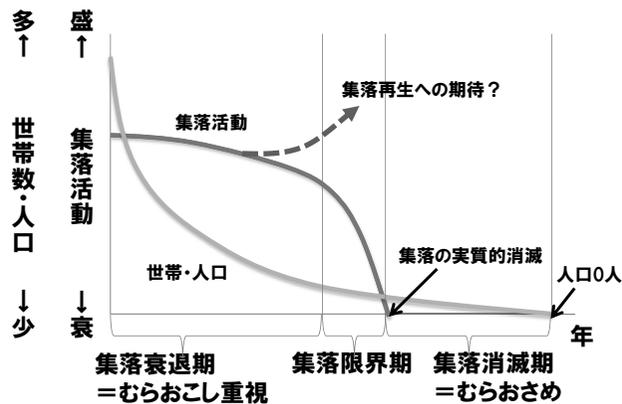


図10 集落消滅のモデル図（笠松（2005）、作野（2006）をもとに作成）

については反論しない。どの時点であるかは明言できないと主張しながらも、過疎・高齢化の行き着く先に集落の衰退・消滅があるという認識は共有されている。そうした立場から、過疎・高齢化への対応や戦略として、「むらおさめ」（作野2006）や「集落移転」（林2011）も視野に入れ、現実問題として議論することの重要性も強調されている。

とはいえ、過疎・高齢化と集落危機の程度との関係は、笠松浩樹が示した集落消滅モデル（図10）に示されるように、単純な直線の図式では説明されない。図10のモデルにおいては、なだらかな傾斜があるポイントまでくると突然滝のように急落する、という曲線が描かれている。集落は人口が減ってもただちに危機に陥らないのである（笠松2005）。小田切も言うように、集落は過疎・高齢化が進んでも当分は「どっこい活きている」（小田切2011）。この「どっこい活きている」期間に対策を講じて若年層の定住者が増加し、以前よりアクティブに機能するようになる集落も出現するかもしれないという期待は、大野も示している。しかし、そうした手立てができず、過疎・高齢化がさらに進行していけば、ある時点ターニングポイントとして急激に集落活動は衰退していき、最後には集落は消滅する。

ところで、今回の分析結果からは、過疎・高齢化と住民の生活意識との関係は、「限界集落」論で述べられる過疎・高齢化と集落の存続危機との関係とはまた異なる、ということが示唆された。

「限界集落」論では、過疎・高齢化の進行が集落の衰退・消滅を生ずる。確かに、集落の存続については、高齢化率が高い集落の住民ほど危機意識が強い、といった直線的な関係が見られる。その点では、住民の危機意識も集落衰退と連動していることが伺える。

ところが、地域への思い入れや住民どうしの結びつきについては、飯南町全体から見れば中程度の過疎・高齢化が起きている集落の住民において、より衰退している。そして、過疎・高齢化が高度に進んだ、いわゆる「限界集落」では、地域への思いは逆に深くなり、また、高年層についてはとくに、住民どうし強く結びついて協力しあうようになる。過疎・高齢化の進行とともに衰退していった地域の団結や相互扶助の意識が、ある時点を境にとくに高年層においてポジティブに転換し、持ち直していくことが伺えるのである。

つまり、地域に対して諦め感や行き詰まり感を持ちがちなのは、「限界集落」の住民というよりは、まだ集落再生の可能性が残っている集落の住民である。過疎・高齢化の影響は、集落の維持・存続よりも住民の意識のほうに先に及ぶのかもしれない。

ただし、過疎・高齢化が高度に進んだ高齢者においては、反対に、地域への思いや住民の共同性は強まる傾向がある。住民の生活意識は、「後がない」という切羽詰まった状況になると、地域中心になるのかもしれない。一見前向きで「限界集落とは呼ばせないように、がんばっていこう」という自発的・積極的な取り組みにつながる意識のように見えるが、集落と住民自身の人生をどう終えるかを考えたときの「むらおさめ」につながる意識なのかもしれない。

5. おわりに

以上、飯南町の住民の生活意識に関する質問紙調査のデータと、集落ごとの高齢化率・人口増加率・世帯増加率のデータを照合することにより、人口的要因と集落住民の生活意識との間

の関連について分析した。飯南町という小さい単位の中で傾向を見ようとしただけなので、今回の結果から結論を急ぐべきではない。ただ、過疎・高齢化と住民の生活意識との関係については、「限界集落」論の集落消滅モデル図で示される過疎・高齢化と集落衰退との関係とは異なる傾向が伺えたことは興味深い。本稿で示したグラフに見るV字やN字の曲線は、一体何を表しているのか。その点について議論するには、過疎・高齢化の程度が異なる、他の市町村のデータを用いた分析が必要である。また、集落調査を通して住民の生の声を収集し、それらを分析することも重要である。

課題は多く残されているが、本稿は、「限界集落」について量的データで議論するための新たな方法を試みることによって、過疎・高齢化と住民の生活意識の関連について一つの論点を示し得たと考える。

【文献】

- 林直樹, 2011, 「過疎集落からはじまる戦略的な構築と撤退」『農村計画学会誌』29(4), 418-421.
- 飯南町, 2006, 「島根県飯南町まちのデータ」(http://www.iinan.jp/category_1st.php?sid=444&listmode=) (2012年9月14日アクセス).
- 笠松浩樹, 2005, 「中山間地域における限界集落の実態」『季刊中国総研』9-3(32), 21-26.
- 国土交通省, 2009, 『過疎集落研究会報告書』(<http://www.mlit.go.jp/common/000039569.pdf>) (2012年9月14日アクセス).
- 小田切徳美, 2009, 『農山村再生: 「限界集落」問題を越えて』岩波書店.
- , 2011, 「農山村の視点からの集落問題」大西隆ほか『これで納得! 集落再生: 「限界集落」のゆくえ』ぎょうせい, 35-68.
- 大野晃, 1991, 「山村の高齢化と限界集落: 高知山村の実態を中心に」『経済』新日本出版社, 55-71.
- , 2005, 『山村環境社会学序説』農山漁村文化協会.
- , 2008, 『限界集落と地域再生』京都新聞出版センター.
- 作野広和, 2006, 「中山間地域における地域問題と集落の対応」『経済地理学年報』52, 264-282.
- 山下祐介, 2012, 『限界集落の真実: 過疎の村は消えるか?』ちくま新書.

Discussion on the Relationship between Depopulation and Aging in Villages and Residents' Attitudes toward Their Life: Using Survey Data from the Hilly and Mountainous Areas of Shimane Prefecture

KATAOKA Yoshimi

(Faculty of Law & Literature, Shimane University)

[Abstract]

This paper examines the relationship between depopulation and aging in villages and residents' attitudes toward their life, by analyzing the data from a survey administered to residents 20 years of age and over in Inan-cho (a town in Iishi county, Shimane prefecture) in January 2012.

Using three categorical variables regarding the population of each village in Inan-cho (i.e., the ratio of aging, the increasing rate of the population, and the increasing rate of households), this paper compares and contrasts the effect of depopulation and aging in villages on residents' attitudes toward their life. Analysis of variance showed the following tendencies. 1) There is a linear relationship between a sense of crisis about continuance of their villages and depopulation and aging in villages. However, 2) the attachment to their villages and the feeling of closeness among residents decline as depopulation and aging in villages progress at the beginning, and then, especially in the case of the elderly (people over 65 years old), these attitudes become positive and recover when depopulation and aging in villages progress considerably. This suggests more research is necessary to clarify why residents in villages in critical situation show more positive attitudes toward their community life.

Key words : depopulation and aging in villages, attitudes toward life, “marginal village”